

演題 小中一貫教育とコミュニティ・  
スクールのあり方  
東京大学准教授 小国 喜弘 先生

みなさん今日は。今日は岸さんがコミュニティ・スクールについて、後でお話がありますので、わたしは小中一貫教育とコミュニティ・スクールのあり方について話したいと思います。

今まで、各地でのコミュニティ・スクールの取り組みを観させていただいて、コミュニティ・スクールを取り入れて絶対によくなるということはありません。コミュニティ・スクールだから、こういうことをやらなければならないということもありません。

今日の参加者の皆さんは、学校の先生方がほとんどで、あとは学校の関係者が多いと思います。そこで、村の子どもたちのことを考え、どんな学校を創りたいのか、どんな教育をしていきたいのか、そういうような思いを明らかにしていくことだと思えます。そのためコミュニティ・スクールを使うと、どうやりやすいのか考えてみるのが大切だと思います。

コミュニティ・スクール制度を意図的に利用し、メリハリのある学校運営をしていくことが非常に重要なことだと思います。

学校が「学びの共同体」を取り入れ、学校が子どもたちに考えさせるべき重要なことは何か、考えてみる必要があります。会場のみなさんも考えてみてください。一つは、「生きるとは何か」ということです。言葉を言い換えると、「よりよく生きるとはなんなのだろう」ということです。また、「幸せとはどういうことなのか」、「より幸せになるにはどうしたらよいのだろうか」ということです。

そう考えたとき、「よりよい学校とは何か」という問いに帰ると思います。今までの我々がやってきた学校の教育は、「よりよい点数をとるにはどうしたらよいか」ということでした。中学を卒業してよい点数の取れる子は、長野高校に通わせ、長野高校でよい点数の取

れる子は、東京の大学に行く。その結果、村を捨てるという子どもたちを育てて来たのかもしれない。

では、東京に行けば幸せになれるのかというと、必ずしもそうではない現状があります。豊かな人生を送るにははるかに木島平村のほうがよい場合もあります。例えば、大学を出て東京で就職するとしても、初任給では下宿代も払えない現状があります。そこで、就職しても親からの仕送りが必要となります。バカバカしい話ではありませんか。

より幸せになるにはどうしたらよいかということは、学校の問題ではありません。教えるべきことを教えるということではありません。幸せには人の判断によってバラツキがあるかもしれません。

何によって幸せなのかは人によって違います。先生も一人の生徒と同じ立場で、一緒に考えていくことが必要です。一緒に考えながら、教養を深めていくことです。言い方を変えれば、いろんな人とどう出会うか、どんな本を読めばいいのかということ、一緒に考えていくことです。

これは明確な答えが出ないかもしれませんが、また、どうでもいいような余計なことを言っているのではないか。村の中では、汗をかきながら自分の人生を切り開いている方がいっぱいいらっしゃいます。そういう方たちと子どもをどう出会わせるのかということが、学校という現場での取り組みになっているのです。

そのためには、コミュニティ・スクールは非常に重要な仕組みになるのではないかと思います。また、点数を伸ばす教育、つまり学力を伸ばす教育にも、コミュニティ・スクールが効果を出しているという研究も出てきています。

前にも言いましたが、点数をとったところでどんないいことがあるのか分からなくなっている時代です。いい大学を出てどんないいことがあるのか、大人たちも子どもたちも考え始めているのです。

今、この村の役に立ちたいとか、目の前の困っている人のために役に立ちたいとか、そういう大人になりたいとかいうモチベーションをかきたてるような教育が必要です。

そういう機会と出会えるか出会えないかで、学校の目的意識が変わってきます。目的意識がかわりますので、点数の意味化を図ることが多くの学校で起こってきています。そういう意味から公立学校が問われる時代になってきています。

「幸せとは何か」という根幹に関わることが、学校に問われてきている。また、大人たちも一緒になって学べる環境づくりも考えられてきている。

大人たちだって、子どもと一緒に学ぶことを通して、「幸せとは何か」ということを改めて考えて、希望や生きがいを取り戻すことが頻繁に起こってきています。そうすると、学校を地域に開くと言うことは、子どもたちだけでなく、地域の人たちにも非常に意味のあることになります。このことは、後で岸さんからお話があると思います。

もう一つ、申し上げたいことは、学校は誰のためにあるのかということです。例えば大学は学生のためにあると言っていたのですが、大学は教師のためにあるということです。

教授とか准教授とかの先生たちが、こういう状況を作ったら居心地のいい環境になるということを政府と大学で行っていることです。それは、大学のことだけではないということを率直に感じていくことです。高校でも、中学校でも小学校でも、幼稚園でも保育園でも、そこに働いている大人が一番居心地のいい環境をつくるのが求められているということです。

法律上では、「子どもたちの学ぶ権利を保障する」ということが学校です。その子どもたちの人権を守るお手伝いをするというのが、先生たちの仕事になるわけです。その意味から、子どもたちをどういう風にしたいか、どんな学びを実現していきたいのか、どんな学校をつくりたいのかという思いが聞き取れるような仕組みが必要になってきます。

別の言い方をすると、この村で9年間の小中学校を経験した生徒の一人から、この村の村長が出てくる、多くの子どもたちが村会議員となる、そして全員が木島平に留まればの話ですが、全員が有権者となって選挙することになります。5年後、10年後有権者となる子どもを育てていると考え、よりよい

村をつくるという考えがあるのではないかと思います。よりよい学校をつくるということは、よりよい村をつくることにつながってくるのです。子どもと一緒に授業をつくるということは、みんなの学校をつくることにつながります。

しかし、学校の運営によって、子どもたちの声を取り入ることをどれだけやってきたのでしょうか。残念なことに日本の現状としていえば、きわめて乏しい経験しか蓄積してこなかったのではなかったかと思うのです。

皆様方は、「木島平教育」ということで、子どもを真剣になって伸ばそうとしていらっしゃる。その時に、子どもの声とか地域の人たちの声とかを、真剣に聞き受けるという仕組みが、学校の中に息づいていれば、皆さんの教育のためにも役に立ちます。

なぜならば、学校への信頼感や学校と積極的に関わりたいという親たちによって、先生方も働きやすい環境になる。

モンスターペアレントというのは、学校の声を聞き取ろうとしてこなかった部分もあるのではないかと思います。それだけではないと思います。お店などではモンスターハンティングというようなことは絶対にしません。親に対して「モンスター」だと言っただけから環境というのは、教師や学校関係者が、学校運営の弊害になると思っているからなのです。

そういう悲しい現実がありますが、それは皆様のせいではなく、もっと大きな教育学の枠組みのせいでもあります。しかし、そういう環境の中で生きているということから目を醒まさなければいけないのではないかと思います。

そういう意味から、「木島平教育」というものは、親とか地域とか子どもの声が真剣に聞き取れるような環境をつくっていくことが大事です。日本の教育の夜明けが実は木島平村から起こってくるのではないかという気がしているところです。

その具体的な話は、これから岸さんにしていただき、一緒にお聞きしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

(記録：木島平中学校 本山)